

奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について (2) —岡田亀久郎顕彰碑, 松屋, 依水園, 吉城園, 八窓庵—

About the Tea-related Historical Sites Existing near Nara Saho College Part2

—Celebration monument Okada Kamekurou, Matsuya, Isuien Garden, Yoshikien Garden,
Hassoan Teahouse—

寺田 孝重
TERADA Takashige

前稿^{注1)}に続いて、本学近辺の「茶」に関係した史跡を紹介する。今回は、茶業の事跡として岡田亀久郎顕彰碑や茶道の事跡の松屋, 依水園, 吉城園, 八窓庵を紹介する。

キーワード：茶の事跡, 岡田亀久郎顕彰碑, 松屋, 依水園, 吉城園, 八窓庵

Key Words : Tea traces, Celebration monument Okada Kamekurou, Matsuya, Isuien Garden, Yoshikien Garden, Hassoan Teahouse

1. はじめに

前稿において、茶道および茶業に関する本学周辺の史跡を紹介したが、本稿においても、佗茶成立期に奈良地域が持っていた影響力や茶業発展に関する事例を述べていきたい。

2. 紹介

2-1 古市 岡田亀久郎顕彰碑

JR奈良駅を始点とする本学方面行きの「山村町行」或いは「藤原台行」のバスに乗り、護国神社を過ぎて1つ目のバス停「春日苑住宅」がある。その停留所の前には、北浦定政^{注2)}墓所と書かれた案内石柱が県道に立っている(図1)。ここが、奈良市古市南町共同墓地なのであるが、著名な人の記念碑があり、その中に岡田亀久郎の碑(図2)がある。

大和地域を含む日本茶業の歴史は、平坦なものではなく、何度も転換点が訪れている。このうちの最大のもの「安政の開港」^{注3)}によって日本が世界経済に参入した際、茶が絹とともにその主力産品となり、生産規模や製造技術で欧米貿易家の評価を受けた事と思われる。この時、世界に対応できる茶業体系の確立に奮闘した人物の一人が、古市出身の岡田亀久郎であった。

『大和人物志』¹⁾によれば、彼は弘化2年(1845)伊賀国阿拝郡の生まれで、津・藤堂藩士であった父が、城和奉行所(藤堂藩が山城と大和地域に持っていた領地を管轄するために設置した奉行所)に配属され、古市の地に赴任したのに伴いこの地に居住したとされる。明治維新後には、茶業の有利性に着目し茶園開発を行い、明治11年(1878)に政府が紅茶伝習所を静岡に設置したときは、すぐこれに応じて技術習得し、翌年には自費で伝習所を古市村内に設立している。また、神戸港からの輸出にも着手し、成功を収めたのであった。しかしその後、病気により一眼を失い、製茶工場を火災により焼失し、さらには販売を委託していた輪



図1 古市南町共同墓地付近



図2 岡田亀久郎顕彰碑

岡田亀久郎記念碑

実利のある所、物皆これ尔従ふ。況や功德の如き者、誰尔之を追慕をさらん。翁緯は保明、通称は亀久郎。和州添上郡古市の人。家世々津藩士たり。維新後思ふ所阿りて農尔帰し、最意を茶業に注ぎ、或は製法の改善越試み、或は販路の拡張を図り、且奮ひて製造所を起し、又組合を設けて伝習を勉め、苦心経営して遂尔効果を収め、古市製及岡田製乃名声日に楊り、褒賞を受けたる数々なりき。此間茶業組合中央本部設置尔際しては大尔奔走するところアリ。奈良県茶業組合聯合会議所の起れる時尔は、選まれて事務員となり、能く其の任務を尽し、以て没するに至れり。翁資性快話尔して、至誠物尔接し、熱心事尔当り、起業以来屢災厄尔遭ひ、殆家産を傾くるに至りしも、操守愈堅く遂尔能く公益を広め、世務を開けること真に後昆の規範とすへきなり。茲尔其の功德を録して之を不朽尔伝ふ。

春雨の ふる市の里能 このめこそ 君可ほまれと
千代尔かをらめ

明治三十五年十一月三十日

奈良県知事 従四位勲四等寺原長輝撰
従三位勲四等前田正名篆額

図3 岡田亀久郎顕彰碑の釈文²⁾

出会社の倒産などに見舞われている。このような苦労を重ねながらも、くじけず製茶技術の伝播を最後まで推進した人物である。この間に、日本茶業組合中央会本部の設置（明治17年）に努力し、大阪府茶業組合取締所の頭取となっている。さらに、奈良県が大阪府から独立後⁴⁾の奈良県茶業組合聯合会議所の設立（明治20年）の時にも創立委員として奔走している。明治34年に57歳で死去しているが、これを惜しんだ全国の有志によってこの石碑が翌年建立されている。碑は図2のように古くなっており碑文は読みづらくなっている。種村道雄氏著『奈良二百名碑』に掲載されている釈文を掲げておく（図3）。

2-2 「松屋会記」⁵⁾の故郷

奈良県庁と奈良県文化会館の間の道を北へ歩いて行くと、NHK奈良放送局の横をぬけて旧市街に入っていく。この道は、前稿で紹介した東大寺の転害門前を通る奈良坂道（京都への街道）の裏道になっており、そのあと上り坂となり、高台にある松永久秀⁶⁾が築いた多聞山城（現 若草中学）に続いて行くが、この途中で東に折れ、転害門やその手前の焼け門につながる地区が今小路と呼ばれ、室町期に町屋として発展していた。

『茶道古典全集 第9巻松屋会記』の永島福太郎氏の解説³⁾によれば、その伝統を伝える地域で、東大寺の寺人として漆屋を営んだのが松屋（土門氏）一族である。この松屋には、徐熙の鷺の絵⁷⁾（図4）を初めとする「松屋三名物」と呼ばれた茶の湯の名物道具が伝世していたし、村田珠光⁸⁾や古市澄胤⁹⁾に関する資料が伝えられていたので、これらを巡って色々な折衝が著名な茶人との間で行なわれた。例えば、千利休は「鷺の絵」の表具を頼まれた時、これは珠光表具であり歴史的価値があると言って松屋側を説得しているし、小堀遠州は、松屋久重に頼まれて、珠光が澄胤に書き送った「心の文」（図5）の表具を直し、鷺の絵と交互に掛けるように薦めている。



図4 鷺の絵 模写⁴⁾



図5 心の文⁵⁾



図6 松屋肩衝⁶⁾



図7 松屋邸宅跡付近

特に利休は、この三名物の価値を重視し、若い弟子の古田織部^{注10)}や瀬田掃部^{注11)}などに侘茶^{注12)}の真髄を知るには、これを拝見して感得するよう命じており、天正13年(1585)の記事には、彼らが利休の紹介状を持って、奈良へ駆けつけた様子が記されている。

松屋源三郎家の代々(久政、久好、久重)は、茶の湯に堪能であり、堺や京都で盛んになった茶道に対して、南都の茶道に誇りを持っていた。松屋にはその名物拝見のために様々な人たちが訪れ、その返礼として松屋を茶会に招いているし、奈良町内での茶会も盛んであったと思われる。これらの膨大な茶会の記録を、三代・百数十年にわたって記録したものが、有名な『松屋会記』である。現在伝わっているものは、松屋が招かれたもの(他会記)ばかりであるが、筆まめであった松屋歴代が自分の茶会の記録を作らないはずがなく、中でも、久重は自家に伝わった資料の編集まで試みており、これは現在『茶道四祖伝書』^{注13)}として出版されている。これから考えても、何時か松屋の開催した自会記集が発見されることも、夢とは言えないのではないと思われる。

この会記によって、初めて知られる茶道史上の重要な項目は、多岐に渡っている。例えば、侘茶の湯における茶花の種類や変遷、茶室の好みの変化、利休・織部・遠州など茶人たちの活動等々がそれになる。そのほかとしては、松永久秀が行なった大仏殿焼き討ちなどは、身近に起こった大事件であるから当然記録されている。

松屋一族は、子孫が江戸後期まで続いているが、その後没落したようで、現在屋敷跡などは分からなくなっている。また三名物の「鷺の絵」と「存星盆」^{注14)}の所在は不明になっており「松屋肩衝」^{注15)}(図6)は根津美術館に所蔵されている。

2-3 依水園と吉城園

奈良県庁の駐車場北側の道を東に行くと、奈良坂に続く道を越えて奈良県知事公舎の前を通り東大寺の境内に向かって行く。この道を突き当たると、東大寺の境内から流れ出てくる吉城川(東大寺境内では水谷川)を挟んで名勝依水園と吉城園(奈良市水門町)があり、両方も公開されている(図8, 9)。



吉城川(中央橋の下)依水園(左)と吉城園(右)

地下水路に消えてしまうが、かつてはこの川にいくつもの水門が設けられ、水車の動力源となり「奈良晒し」^{注16)}など商工業発展の原動力となっていた。現在の町名のもとになった水門はもう見られないが、北隣にあたる東大寺^{てがいのん}の「転害」は元来大きな石臼を意味しており、天平の当時から製粉などに好適な地域であったと思われる。水門町には吉城川だけではなく、三笠山や春日原始林等を水源とする細流がこの他にもあり、いずれも佐保川へ合流しているが、これらは製粉業や晒し業に利用されていたと思われ、依水園後園の池には、晒し業に使われていたらしい、大きな石臼が飛び石として配置されている。

さらに、茶業の観点からすると、前稿で述べたように、奈良坂の周辺は中世以来の茶の産地で、般若寺や転害郷が有名であるし、東大寺の知足院や新禅院など、茶業に係わっていたと推測される⁷⁾塔頭^{たつちゆう}^{注17)}が近所に存在している。依水園の前庭と吉城園は、興福寺の塔頭であった摩尼珠院の庭園であったとされている。場所的には東大寺の方が近接するが、この辺りが、両寺院の領地的な境目で、興福寺もすぐ近くの所にある。

前稿でも触れたが、現在一般に行われている、茶道（佗び茶湯）の原型が奈良で発生し、この地がその揺籃^{ようらん}^{注18)}であったことは余り知られていない。そして、この茶道発祥に依水園や吉城園の地が深く関わっていたと考えられる。

中世の婆娑羅^{ぼさらか}^{注19)}大名たちが楽しんだ、唐物好みの「闘茶」^{注20)}の時代を過ぎて、南都・称名寺出身の村田珠光が、小座敷で行う茶道を始めたと言われ、彼の一の弟子と呼ばれたのが、前稿で紹介した古市澄胤であった。このような文化的機運は、経済力を持った町人層を基盤にしており、当時から「南都」と呼ばれた奈良の地で、茶道の祖型が発生し、京都や堺でその後の発展が見られるのも、必然的な歴史の流れといえるであろう。珠光は京都に移って茶の湯活動を行ったが、奈良に於いては、珠光や澄胤を輩出した伝統が色濃く残ることになる。その伝統を伝えるのが今小路で漆屋を営んだ松屋などで、前述した『松屋会記』が残されることになる。この中に、摩尼珠院の名前が6ヶ所と、水門の地名が2ヶ所出てくる。

『松屋会記』の記事で摩尼珠院が出てくるのは、「松屋久政会記」の元龜3年（1572）12月の条に始まり、天正期には6年（1578）、7年、9年、13年と見ることができる。記事の内容はいずれも比較的簡単なものが多く、同行客としては大乘院門跡家^{注21)}の家宰であった松井氏や知足院主など、やはり寺関係者が多いようである。会記では、次代の松屋久好の時には記録はなく、「松屋久重^{注22)}会記」まで飛んで、寛永8年（1631）3月に一度出ている。

茶会の様子を二、三見てみると、まず天正6年の条で「四月十一日の項には、大乘院の松井氏、宗順、久政三人が客で、甌^{こしき}の釜^{注23)}、天目茶碗^{注24)}、手桶^{注25)}、かめのふた^{注26)}と言った道具組であった。」

寛永8年の条には「三月二十七日の項には、東大寺の正源院・中性院、神民部と久重が客で、沢庵和尚の字が掛けられ、その後かねの筒花入れにツバキとテッセンが生けられた。茶入は春慶^{注27)}、茶碗は三島^{注28)}であった。」

面白いのは天正13年3月14日で、日中に「花見」として大勢で出かけている記録しがなく、茶会より花見優先であったと思われる。振り返ってみれば、摩尼珠院での会は、



図9 依水園と吉城園及び八窓庵

なぜか春の時期が多い様にも感じられる。近所にあたる知足院には今も「ナラノヤエザクラ」の古木が残っていて天然記念物に指定されているが、この花見も「奈良の都の八重桜」の花見であったかもしれないし、宴会の雰囲気を残した、中世的な茶会だったのではないかと推測される。

さて、次に水門町での茶会としては「久重会記」の寛永 12 年(1635)の条に「六月十三日 水門ニテ 辻七右衛門殿へ」とあって南都奉行の中坊飛弾守^{注 29)}や久保権太夫などと出かけているし、「七月二十一日には水門 辻七右殿ニテ 横井宗清へ」として、中坊飛弾守や松花堂昭乗の兄に当たる一条院の坊官の中沼左京^{注 30)}達と朝茶の会が持たれている。

これらの会は、水門町にあった中坊氏の家老である辻七右衛門家で行われたものようであるが、狭い水門町の中に風光明媚な所がそれほど多いとは思えないので、こちらも吉城川沿いの地ではなかったかと推測している。

現在の依水園^{さんしゅうてい}三秀亭は煎茶道^{注 31)}の仕様になっているが、『松屋会記』に見られる様に、侘び茶の湯が生まれた初期のころには、吉城川沿いの地域で色々なタイプの茶会が催され、それらを踏まえ侘び茶湯が成熟していったと考えられる。

その環境として、この地は絶好のものであり、依水園では後世さらに後園や茶室が、吉城園では書院などが完備してゆく先駆けをなしたのである。

2-4 古田織部と八窓庵

毎年正倉院展が開かれる奈良国立博物館には、本館裏側に、古田織部が作ったとされる「八窓庵」という茶室が残っている。

織部は、「利休七哲」^{注 32)}に挙げられる茶人であるが、入門当時には2-2に述べたように、利休の指導で「松屋名物」の見学に来るなどしている。

利休切腹後は、茶道界の指導者として「織部焼」^{注 33)}などに見られるように、利休とは大分違った茶の湯を展開している。堺の町衆であった利休と違い、小なりとは言え武家大名であった彼は、茶室でも利休のものより広々と明るい設計が多いようである。徳川政権下では、将軍秀忠の茶道指南役となっているが、元和元年(1615)の大坂夏の陣後に、彼自身も利休と同様に奇妙なかたちで切腹をさせられている。

織部好みと称される茶室では、織部の義弟を流祖にもつ、藪内流^{注 34)}家元にある「蕪庵」^{注 35)}が有名であるが、この「八窓庵」は前稿で紹介した一乗院門跡と並んで興福寺の門跡を出した大乘院門跡家にあつたものである。四畳台目に中柱があり、下座床を持つ茶席となっている(図 10)。

大乘院は、現在の奈良ホテルの南側山裾にあり、西側の道路に面して大きな大乘院跡の石碑が立っている。この園地は、旧国鉄が管理する大乘苑という宿舎であったが、奈良文化財研究所による庭園跡発掘により、江戸期以前の池泉の汀線、庭石や遺構などが発見されたので、復元整備が行なわれ、名勝旧大乘院庭園として公開されている。

八窓庵(図 11, 12)は、東大寺四聖坊にあつた「八窓の席(隠岐録)」^{注 36)}や興福寺慈眼院の「六窓庵」と並び「大和三茶室」と呼ばれてきた。この内「八窓の席」は東京に移築されていたが、戦災により焼失し、「六窓庵」は東京国立博物館に保存されている。「八窓庵」は、奈良の篤志家によって明治 25 年(1892)に当時の帝国奈良博物館に献納移築されたものである。これらの茶室は、多窓式と呼ばれ、明るく開放的な部屋を好んだ織部や有楽^{注 37)}の流れを汲む物とされている。中でもこの八窓庵は保存状態もよく、手入れも行き届いておりこの形式茶室の白眉といえるものである。様々な高さの開け

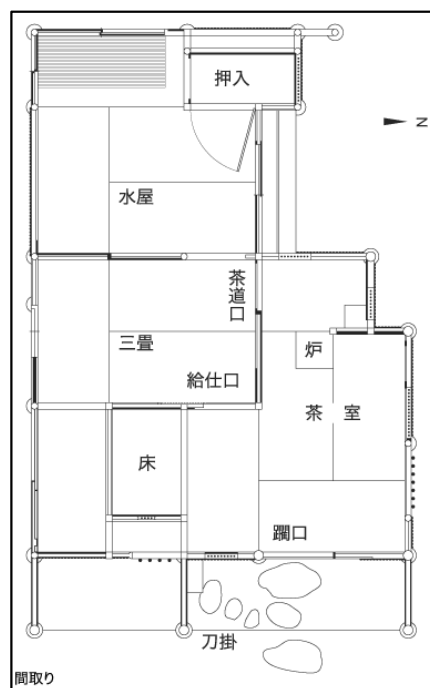


図 10 茶室八窓庵間取り⁶⁾



図 11 八窓庵外観⁶⁾



図 12 八窓庵内部⁶⁾

られた窓が、それぞれの役目を良くこなし、不統一感はまったく感じられない。このように、窓を自由自在に配置するのが織部好み茶席と言われる理由となっている（図 11, 12）。

3. おわりに

前稿に続けて、本学近辺にある茶業や茶道に関係する事跡として岡田亀久郎顕彰、松屋一族、依水園、吉城園及び八窓庵について紹介を行った。次回も紹介の継続をして行きたい。

注釈

注 1) 寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について（1）」、『奈良佐保短期大学研究紀要』, 20, pp. 95-98 (2012)

注 2) 津・藤堂藩の城和奉行所（古市奉行所）に出仕し、大和の御陵や歴史地理の研究で有名な学者である。

注 3) 安政 5 年（1858）江戸幕府がアメリカをはじめ西洋先進 5 か国との間に締結した修好通商条約に基づいて安政 6 年（1859）から横浜、長崎、箱館の 3 港で自由貿易が開始された。貿易は完全に外国商人の独占であり、取引は開市開港場に設けられた外国人居留地内の外国商館で行われた。居留地は外国人の自治が行われ、領事裁判権と結びついて実質的に司法・行政・警察権を外国に握られた国内植民地であり、商取引は日本人商人に不利であった。輸出では生糸が圧倒的で、茶が第 2 位、両者で大部分を占めた。輸入では綿製品が第 1 位、羊毛製品が第 2 位であり、ほかに幕末維新の動乱期に武器、艦船の輸入が増加した。

注 4) 奈良県は、明治 4 年に設置されたが同 9 年堺県に吸収され、さらに堺県が同 14 年に大阪府に統合されたので、大阪府大和国と称されていた。明治 20 年に奈良県として独立する。

注 5) 現存する最古の茶会記の一つ。奈良の塗師で松屋家の久政、久好、久重 3 代にわたる他会記の集成書。現存する流布本は江戸中期の転写本であり、書名も原書のままとはいえず、原型を正しく伝えているとは言えないと思われる。構成は、天文 2 年（1533）～慶長元年（1596）の久政他会記、天正 14 年（1586）～寛永 3 年（1626）の久好他会記、慶長 9 年（1604）～慶安 3 年（1650）の久重他会記からなる膨大な茶会記録が収められており、茶道成立期の様子を知る上で最も貴重な資料の一つとなっている。全文は『茶道古典全集 9 巻』淡交社（1957）或いは『四大茶会記（茶の湯の古

典3)』熊倉功夫校訂訳注 世界文化社(1984)に掲載されている。

- 注6) 戦国時代の武将。山城国あるいは摂津国出身。三好長慶の家臣で、初め右筆(事務官)として仕えた。天文22年(1553)摂津滝山城(神戸市中央区葺合町)主を命ぜられ、八部・菟原郡を支配。永禄2年(1559)大和平定のため大和信貴山城主(奈良県生駒郡平群町)となる。翌年弾正少弼、幕府御供衆に列せられる。永禄5年(1562)奈良北部に天守閣をもつ多聞山城(奈良市法蓮町)を造営し大和を支配した。永禄8年(1565)將軍足利義輝を三好三人衆らと暗殺し、義輝の実弟一乗院覚慶(後の將軍義昭)を奈良に幽閉した。永禄9年(1566)久秀は、和泉・河内・摂津の各地で三好三人衆に敗れ、1567年大和に逃げ帰り、同年10月には東大寺に布陣した三好三人衆を攻撃して大仏殿を焼き払った。翌年入京した織田信長の軍門にくだって大和一国をまかされるが、天正5年(1577)8月信長に背き、信貴山城を攻められ自害した。
- 注7) 中国五代江南鐘陵の画家徐熙筆と伝える。足利義政から村田珠光が拝領し、一文字無しの佗び表具を施したので一躍有名となり、利休は「数寄の眼目」と称したが、幕末頃所在不明となる。図4は前稿で紹介した真敬法親王の臨書による古写本である。
- 注8) 室町時代の茶人。奈良出身。少年のとき奈良市の称名寺に入ったが、やがて寺を出て京都に上り、茶人となった。京都では六条左女牛(下京区)に住んだと伝えられる。一休に参禅し、印可の証として園悟克勤の墨蹟を与えられ、これを初めて茶掛に用いたことから墨蹟開山と称せられる。能阿弥から『君台観左右帳記』の相伝を受けており、書院茶の世界と無縁ではなかった。連歌師の宗長や香の志野宗信らとも親交した。一の弟子であった大和の土豪、古市澄胤に与えた「心の文」には、「和漢の境を紛らかすこと」の必要を説き、当時唐物にかわる和物数奇が高揚し始めていたことを示す文献として貴重である。「月も雲間のなきは嫌にて候」(『禅鳳雑談』)の語も珠光の美意識を示すものとして有名である。
- 注9) 室町～戦国時代の武将。大和出身。号は播磨公。永正5年7月河内(大阪府)高屋城の畠山尚順を攻めて敗れ自害した。茶祖の村田珠光の弟子として知られる。前稿の2-4を参照されたい。
- 注10) 安土桃山～江戸初期の武将で茶人。初め織田信長に仕え、信長横死後は豊臣秀吉に従い、天正13年(1585)従五位下織部正に叙任され、京都西岡を与えられる。慶長3年(1598)の秀吉没後は徳川家康に仕え、関ヶ原の合戦には徳川方に属して活躍した。千利休とは天正10年(1582)頃より親交し、天正19年(1591)2月に利休が堺に蟄居を命ぜられたとき、これを細川三斎(忠興)と淀の舟本で見送ったことは有名。のちに利休七哲の1人に数えられるが、利休没後、秀吉の命で利休の茶を改めて武門の茶法を制定したとも伝えられ、慶長初年(1596)には茶の湯名人との評を得ている。その作意は、形のひずんだ、いわゆる沓型茶碗や、多窓形式の茶室、景気を好んだ露地などに示され、大きな影響を与えた。元和元年(1615)大坂夏の陣に大坂方に通じた廉で罪に問われ、6月伏見木幡の屋敷で自刃した。
- 注11) 安土桃山時代の武士で茶人。天文17年生まれ。豊臣秀吉につかえ、近江(滋賀県)に領地をあたえられた。茶の湯は千利休の高弟で、利休七哲の一人。大きな平高麗茶碗と掃部形とよばれる大形の茶杓をもちいた。豊臣秀次事件に連座し、文禄4年(1595)7月5日刑死。48歳。名は正忠、伊繫。
- 注12) 茶の湯の一つ。道具や調度の豪華を排して、簡素静寂な境地を重んじたもの。村田珠光が始め、武野紹鷗を経て千利休が大成した。
- 注13) 松山吟松庵校註；熊倉功夫補訂『茶道四祖伝書(茶湯古典叢書1)』思文閣(1974)
- 注14) 存星とは、漆工芸の技法形式をさすもので、『君台観左右帳記』に、色は黒または赤、地は錦のように掘るとあり、明代の張成を第一の上作としている。奈良松屋伝来の三名物中の「存星の盆」が有名であったが、現在所在は不明である。

- 注 15) 重要文化財。大名物。漢作唐物肩衝茶入。はじめ松本珠報が所持したので「松本肩衝」といわれたが、その後松屋源三郎に伝わったので「松屋肩衝」といわれるようになった。松本珠報から足利義政に献上され、これを村田珠光が拝領、珠光はこれを弟子の古市播磨律師澄胤に伝え、さらに松屋源三郎が譲り受けたという。胴のふくらの強い肩衝で、釉の景色に富み、半面四ヶ所になだれが見られる。
- 注 16) 奈良地方から産出する晒し布。生平を漂白したもので、慶長年間（1596～1615）に始まり、麻織物の最上品とされた。
- 注 17) 本寺の境内にある末寺院。塔中とも書く。塔は墓の意で、もとは高僧が寂すると、弟子がその塔の頭に小庵を建て、墓を守ったことに始まる。のちには、大寺院の高僧が隠退したときなどに、寺の近くや境内に小院を建てて住み、没後も門下の人々が、この小院に住んで墓塔を守り、祖師が生けるがごとく奉仕するに至り、それらをも塔頭と称する。
- 注 18) 赤ん坊を入れて、ゆり動かす小さなかご。ゆりかごのこと。比喩的に幼年時代のことや、物事が発祥し初期の発展を遂げた段階や場所をいう。
- 注 19) 婆沙羅・婆佐羅なども表記する。南北朝内乱期にみられる顕著な風潮で、華美な服装で飾りたてた伊達な風体や、派手で勝手気ままな遠慮のない、常識はずれのふるまい、またはその様子を表す。また珍奇な品物などをも意味する。サンスクリット語の vajra バジラ（金剛・伐折羅）から転訛した言葉といわれる。
- 注 20) 茶の産地別（本茶・非茶）による色や味を飲み分けて勝負を競う茶会的一种。鎌倉時代末から室町時代中期の足利義教の頃にかけて爆発的な流行をみせた。闘茶の起源は中国の宋代まで遡り、蔡襄（1012～1067）は『茶録』のなかで「闘試」の語を使い、同じく范仲淹（989～1052）は「闘茶歌」という記述がある。茶の色による識別や茶と水との融合度をみることから始まり、茶の味の良し悪しを争うところにまで及んでいた。しかし、書院茶や草庵茶の草創とともに次第に衰退し、千利休時代にはかぶき茶といわれて残滓だけになっていたが、江戸時代中期に千家七事式の一つに「茶歌舞伎」として取り上げられ現在に至っている。
- 注 21) 興福寺を代表する門跡。奈良市高畑町に旧跡がある。隆禪法印によって寛治元年（1087）に創設された。3代目の関白藤原師実の子尋範より撰関家の子弟が入室して発展。鎌倉時代、九条家や一条家出身の門主は禅定院や龍華樹院等の院主を兼帯し、長谷寺・永久寺などの末寺、莊園、寺僧、坊人、各種の商工業座などを支配して、一乗院と並ぶ大勢力を形成した。室町時代以降、しだいに衰退。近世には朱印地 951 石を有する門跡として存続したが、明治維新後、門主が還俗したことによって廃絶した。
- 注 22) 安土桃山～江戸時代前期の商人で茶人。奈良の塗師松屋の5代め。分家の松屋久好が死去したあと、漆屋源三郎を名のる。久政、久好、久重3代の茶会記「松屋会記」を集成し、他に「松屋名物集」や「松屋筆記」を編集した。
- 注 23) こしき口と言ひ、釜の口がやや高くなっている茶釜。
- 注 24) 中国天目山で使用されていた茶碗で、高台が小さいので普通天目台という台にのせて使用するが、ここでは台は使用しなかったと思われる。
- 注 25) 水をくむための取っ手のついた桶のことであるが、このデザインの水指のこと。
- 注 26) 水を捨てる容器である建水の中で、南蛮ものの瓶の蓋を利用したもの。
- 注 27) 瀬戸の茶入れで、加藤四郎左エ門（藤四郎春慶）作と言われるものの惣称である。様々な形状のものにこの名が冠せられている。
- 注 28) 三島手と言われる、印やへらによって白い筋々花文をつけた茶碗。現在も多く作られているが、元来は李氏朝鮮初期に慶尚南道で作られた茶碗。
- 注 29) 中坊秀政。中坊氏は興福寺の衆徒として、春日社の造営をはじめ神事・祭礼を奉行していた家柄であり、奈良奉行職に起用された。
- 注 30) 江戸時代前期の茶人。松花堂昭乗の兄。近衛家につかえ、興福寺一乗院の諸大夫中沼家の養子となる。妻は小堀遠州の妻の妹。文筆をよくし、茶道具名物をあつめた。

本姓は喜多川。名は元知。

- 注 31) 喫茶法の一つ。中国明代の文人趣味に始まり、江戸初期に日本に伝えられて、文人墨客の間に広まり、売茶翁高遊外（1675～1763）の出現によって一つの方向を示され、いわゆる煎茶文化を形成した。次第に一般にも広まり、茶の湯とともに茶道文化として現代まで受け継がれてきたものである。
- 注 32) 利休の高弟七人のことで、利休七人衆が古い呼称。その顔ぶれは時期により変動がある。承応元年（1652）に没した奈良の塗師家松屋久重の編になる『茶道四祖伝書』に「七人衆」として、加賀の肥前（前田利家）、蒲生氏郷、細川忠興（三斎）、古田織部、牧村兵部、高山南坊（右近）、芝山監物の七人をあげているのが初見。ついで千宗旦の子、逢源齋宗左が寛文3年（1663）夏に執筆した『江岑夏書』に、「利休弟子衆七人衆」として、前七人のうち前田利家に瀬田掃部が入れ替わったほかは同じ顔ぶれをあげている。
- 注 33) 美濃国（岐阜県）東部の美濃窯で焼かれた創造性豊かな陶器。同地は平安時代以来の製陶の伝統があるが、室町末期に至って大きな展開をみせ、とくに新興の「わび」の器、茶の湯の道具に供すべく、茶人の趣向をもった茶具を焼造し始めた。その延長上に桃山時代後半の慶長（1596～1615）初年から創作され始めたのが織部焼で、作風・意匠のうえに当時の茶道界のリーダー古田織部好みといわれる特色があるため、この名称でよばれる。装飾には緑釉と鉄絵が活躍する。緑釉だけのものは総織部、鉄絵併用は鳴海織部、志野風の色濃い鉄絵は志野織部、黒釉のかかった織部黒、黒釉に鉄絵を加えた黒織部など多様な作風が繰り広げられた。
- 注 34) 茶道の分派の一つ。藪内宗巴を遠祖とし、その養子剣仲紹智が千利休に師事して創始。比較的古風を保つ。三千家を上流というのに対し下流という。
- 注 35) 藪内家を代表する茶室。大坂の陣に出征する古田織部が、義弟にあたる藪内家初代剣仲に与えた茶室であると伝えられている。2代真翁は西本願寺の茶道師家に迎えられ、門前に屋敷を移すことになった。このとき剣仲屋敷の茶室も移され、露地も忠実に復原されたとみられる。茶室は燕庵と名づけられ、藪内家の代表的な茶室として尊重されてきた。客座との境に二枚襖を隔てて相伴席を付設した点に燕庵の最大の特色があり、この形式は特に武家社会において歓迎された。窓が多いのも織部の作風の特色で、点前座勝手付きの色紙窓以下全部で10窓を数える。墨蹟窓に花入れの釘を打つこと、雲雀棚とよばれる上棚の長い釣棚の形式なども織部の作意を伝えている。
- 注 36) 東京国立博物館庭園にある茶室。もと奈良の興福寺慈眼院内にあり、慶安年中（1648～52）に金森宗和の好みで成ったと伝えられる。明治初年、画家高階在晴が入手し、在晴の没後明治8年（1875）東京帝室博物館が購入した。茶道口と給仕口を矩折りに配置するのは織部や遠州の好んだ間取りである。墨蹟窓がない点など、構成意匠に宗和らしい好みを見つけ出すのは難しいが、古格はなお失われていない。
- 注 37) 安土桃山時代～江戸初期にかけて活躍した武将で茶人。織田信長の弟。通称源五郎、名は長益。本能寺の変には二条御所にいて襲撃されたが、難を逃れている。その後、甥信雄と共に豊臣秀吉に対抗するが、和解してこれに臣従、剃髪して有楽と号し、秀吉の御伽衆を勤めている。秀吉の没後は徳川家康につき、関ヶ原の戦いの戦功により、大和山辺郡に3万石の知行地を与えられたが、その後、大坂城に入り、淀君の叔父として淀君・秀頼母子を補佐している。大坂冬の陣後も家康との和解にあたったが、主戦派が大勢を占めるに及び、元和元年（1615）夏の陣を前にして城を去り、京都二条、ついで東山建仁寺の塔頭正伝院（現正伝永源院）を再興してこれに隠棲した。

引用・参考文献

- 1) 奈良県編：『大和人物志』、名著出版、pp.752-754（1974）
- 2) 種村道雄：「一一六、岡田亀久郎記念碑」、『奈良二百名碑』、種村道雄（自費出版）、

(2007)

- 3) 千宗室ほか編：「松屋会記」, 『茶道古典全集第9巻』, 淡交社, pp.455-491 (1957)
- 4) 古賀健蔵：『床飾・炭道具：茶道用語辞典 I (カラーブックス 516)』, 保育社, p.2 (1980)
- 5) 創元社編：『茶人篇：茶道巻の五』, 創元社, 口絵 (1936)
- 6) 根津美術館蔵：「肩衝茶入銘松屋」, <http://www.nezu-muse.or.jp/jp/collection/detail.php?id=40091> (2013.11.14)
- 7) 寺田孝重：「奈良県における茶業発達過程の研究」, 『奈良県農業試験場研究報告』特別報告, 奈良県農業試験場 (1995)
- 8) 奈良国立博物館：「茶室八窓庵」, <http://www.narahaku.go.jp/guide/07.html> (2013.11.14)
- 9) 種村道雄：「一一六, 岡田亀久郎記念碑」, 『奈良二百名碑』, 種村道雄 (自費出版), pp.61-63 (2007)
- 10) 井口海仙：『茶道入門 (カラーブックス 119)』, 保育社, (1967)
- 11) 古賀健蔵：『点前道具：茶道用語辞典 II (カラーブックス 526)』, 保育社 (1981)
- 12) 古賀健蔵：『茶席・茶事：茶道用語辞典 III (カラーブックス 543)』, 保育社 (1981)
- 13) 有馬頼底, 稲畑汀子, 筒井紘一監修：『茶の湯の銘大百科』, 淡交社 pp.566-567 (2005)
- 14) 国史大辞典編集委員会編：『国史大辞典第10巻』, 吉川弘文館, p.755 (1989)
- 15) 日本大百科全書, Japan Knowledge, <http://www.jkn21.com/> (2013.11.14)